

1 単元名 わたしは日浦の観光大使!

2 単元の目標

自分が学んでいる地域の特産物について学ぶ中で、地域の活性化に携わる人々の思いや願いに気づくとともに、地域のために自分たちができることを考え、行動できるようにする。

3 単元について

(1) 教材観

日浦地区は、松山市の北東部、石手川ダムのさらに上流にあり、緑豊かな山林に囲まれている。松山市の水源地域に指定されており、昔から農林業がさかんに行われてきた地域である。水源の森を守るため、石手川ダム水源地域ビジョン推進協議会と地域が一丸となって山林を手入れし、川の水を清涼に保つ努力を続けている。子どもたちも「緑の森少年隊」として、河川や道路清掃にも取り組み、豊かな自然を後世に残すために努力を続けている。

しかし、少子高齢化が進み、休耕地も増え、日浦の自然豊かな田園風景も変わりつつある。そこで、日浦地区の農産物のおいしさのひみつを探る中で、農業に従事する方の思いや願いに触れ、地域が抱える課題に気づき、自分に何ができるか自分事として感じる事ができると考える。

(2) 児童観

本学級の児童(男1名、女5名、計6名)は、明るく、何でも言い合える関係性が築かれており、自分の意見を堂々と発言している。学校生活や学習に対しても前向きで、お互いに協力して物事を共に楽しむことができる。

入学当初から、地域に出かけ、川遊び、玉ねぎやほうれん草の収穫体験、ヤギとの触れ合いなど、様々な自然体験を積んできている。5年生の1学期には、ほうれん草農家さんのハウスを探検させてもらったり、米農家さんの田んぼを尋ねたりすることを通して、農作物を育てている方の思いも聞くこともできた。頂いた食材は、家庭に持ち帰って家族と共に料理をしておいしく食べる経験をし、日浦地区の恵みを実感している。しかし、日浦地区が抱える課題について目を向けている児童は少ない。

(3) 指導観

単元の導入では、1学期の学びを振り返る。日浦地区の里山の風景や入学当初からの地域の方との触れ合い、野菜作りや米作り体験を振り返り、この地域からたくさんの恩恵を受けていることを再確認する。日浦の農作物は、日浦地区の気候、石手川のきれいな水、そしてこの日浦を愛する人の思いでおいしく育てられていることを学んできた。そこで、再度、野菜づくり名人さんを訪ねて、収穫、出荷体験を行い、日浦で農産物を営む喜びと苦勞を知る活動を設定する。また、日浦地区の水田の8割を管理している米作り農家さんを訪ね、稲刈り体験やインタビュー活動を設定する。後継者問題や自然豊かな地域が抱える課題にも目を向けることで、自分たちにできることは何かを追求する学習を行う意欲をもたせたい。

家庭科『ごはんとお味噌汁』の単元とも関連を図り、実際に収穫したお米を食材として用いることで、農家の方と自分の生活が繋がっていることを実感させたい。日本人の主食であるお米のおいしさや、新鮮なほうれん草のおいしさを再確認した子どもたちは、このおいしさをみんなに知ってもらいたい、食

べてもらいたいという思いが高まると思われる。そこで、出場が決まっていた「子ども屋台選手権」で日浦産の食材を使ったメニューを提案することで、日浦を PR する活動へと繋げる。

さらに、社会科の学習と関連を図り、世界の食糧事情について考える中で、食品の安全性や食品ロス問題などにも目を向けさせたい。そして、「食」をめぐる様々な人々が課題を解決しようと活動をしていることも知って欲しい。

単元の後半では、活動を振り返り自分たちが調べた日浦産の農作物のおいしさや地元産の消費拡大を PR するために、何ができるかを考える活動を取り入れる。PR方法のアイデアを出し合い、地域へと発信する活動を行う。自分の活動が、地域への貢献につながることを体感させたい。

(4) ESDとの関連

ア この題材で働かせる ESD の視点(見方・考え方)

- ・相互性・・・私たちは、自然から大きな恩恵を受けている。自然の恵みに感謝しながら山林に手を入れ、水源の森を守り、きれいな川を保ち続ける努力が必要である。
- ・連携性・・・日浦産の美味しい農作物の生産を続けていくためには、後継者問題にも目をむけていかなければならない。
- ・責任制・・・地産地消を心掛け、旬の野菜で食卓を彩る食生活を心掛けたり、賞味期限や消費期限の違いを理解して自分の消費行動を見直したりする必要がある。

イ この学習を通して育てたい ESD の資質・能力

【批判的に考える力(クリティカル・シンキング)】

- ・自分の日々の行動を見つめ直し自然の恩恵を受けるだけになっていないかを考えることができる。
- ・自分の食生活や消費行動が、自然を守ることになっているのか批判的に考えることができる。

【多面的・総合的に考える力(システムズ・シンキング)】

- ・おいしい野菜やお米を作っている生産者の方が、これからも継続して働き続けることができる社会の仕組みを作ることが、自然環境を守り、安定した食糧生産を確保に繋がる。

ウ この学習を通して育てたい ESD の価値観

【世代内の公正】

- ・生産者人口の減少や高齢化も進んでいる。生産者のみに負担をかけるのではなく、社会全体で食料生産に目を向け、IoTで農業のIT化を進めることも大切である。
- ・消費者は、豊かな消費行動の本質を考え、世界の食料問題、飢餓問題にも気付き、行動を起こすことも大切である。

【自然環境や生態系保全を重視する】

- ・里山の風景は、人が手を入れることで守られている。この里山を守るために活動している人たちの存在や思いを知り、自分にできる自然保護について考える。自分たちの行動が、果たして自然環境や生態系保存に影響を及ぼしていないかという視点で自分たちの生活を見つめ直すことも大切である。

【幸福感を大切にする】

- ・「本当の幸福感とは、何か」自分も自分の周りも、そして自分の住んでいるまちや社会が幸せになることが、真の幸福につながるのではないか。

4 達成が期待される SDGs

【11 住み続けられるまちづくりを】

【15 緑の豊かさをもまろう】



5 単元の評価規準

ア 知識・理解	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①日浦地区の農産物のおいしさ、生産者の思いや願いが分かる。 ②目的に応じた情報収集の仕方を考え、得た情報の比較・分類の方法を理解している。	①自ら課題を設定し、解決方法を選択・決定し、見直しをもって追及している。 ②みんなの意見や地域の人へのインタビュー、収集した情報を比較したり分類したりして整理することができる。	①日浦産の野菜のおいしさをPRできる方法を考えたり、見つけたりしている。 ②日浦地区観光大使としてPRの仕方について、他者の考えを受け入れ尊重しながら、協働して考えている。 ③自分たちができる方法を進んで考え提案しようとしている。

6 単元計画(全22時間)

◇ 指導と評価の計画(22時間) ※このうち3時間は、「総合開き」「中間報告」「学期末報告」にあてる。

小単元名(時数)	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
生活・総合開き (1)【全学年】	・生活科と総合的な学習の時間の目標や内容の概要を聞き、6年間の学習が「地域とのつながり」を軸に関連していることを理解する。 ※社会科「これからの食料生産とわたしたち」関連				
1 日浦地区の野菜やお米について詳しく調べる。(7)	・日浦地区で米作りやほうれん草栽培を行う農家さんについて詳しく調べる、「日浦産の野菜やお米についてもっとさぐる」という課題を設定する。(1)		①		・発言内容 ・ワークシート
	・米作り名人さんに米作りへの思いを聞く計画を立てる。質問したいことや探検の準備をする。(1)			①	・行動観察 ・記録シート
	・脱穀体験をする(コンバインで脱穀) ・河中町の米作り名人さんにインタビューする。(2) 玉井宏和(河中町・米農家・川施餓鬼保存会会長)	①			・発言内容 ・課題カード
	・探検してきたことをまとめよう。(1)	②	②		・記録シート
	・ほうれん草収穫体験をする。(2) 野菜名人(伊吹さん)から、土作りから教わる。 松下さん(水口町・ほうれん草農家) 松野禎治(日浦地区まちづくり協議会)			①	・探検メモ
	・世界にも目を向け、世界の食糧事情(食品ロス)について考える。(1)	③			・発言内容
2 日浦産の野菜とお米を使った料理を提案しよう。(5)	・日浦産のお米とほうれん草をつかったメニューを考えよう。(1)		③		・提案内容
	・子ども屋台選手権で掲げる看板やメニュー表、日浦の農産物を作っておられる方々のポスターを作成して、みんなに広く知らせよう。(2)			②	・行動観察
	・調査したことや体験したことを等を整理して、中間報告会の準備をする。(1)			①	・発表内容

中間報告会 (1)【全学年】	・各学年の生活科と総合的な学習の時間の活動報告を聞き、他学年の活動のよさや自分たちの活動との共通点を見だし、次の活動への意欲を高める。(1) ※国語科「意見文を書こう」関連			
2 日浦産の魅力を発信しよう。 (6)	・「日浦の魅力をもっとたくさんの人に知ってもらうには、どうすればよいだろう。」という課題を再設定し、日浦の町を元気にするアピール方法を話し合う。(1)		①	・発言内容
	・日浦の魅力を再度話し合い、自分がアピールしたい内容を決めて、必要な情報を集める。(2)		②	・記録シート
	・動画編集の仕方を学び、伝えたい内容を効果的に伝えることができるようにする。(2)	③		・発言 ・作成動画
	・お互いの作品を見合い、検討し、期末報告会の準備をする。(1)		③	・行動
期末報告会 (1)【全学年】	・各学年の生活科と総合的な学習の時間の活動報告を聞いたり、発表したりして、他学年の活動のよさや自分たちの学びを振り返る。(1)			
3 これからの考えよう。(1)	・今後の自分たちと地域との関わりや環境との関わりについて、これまでの活動を振り返ってまとめる。(1)		④	・発言内容 ・記録カード

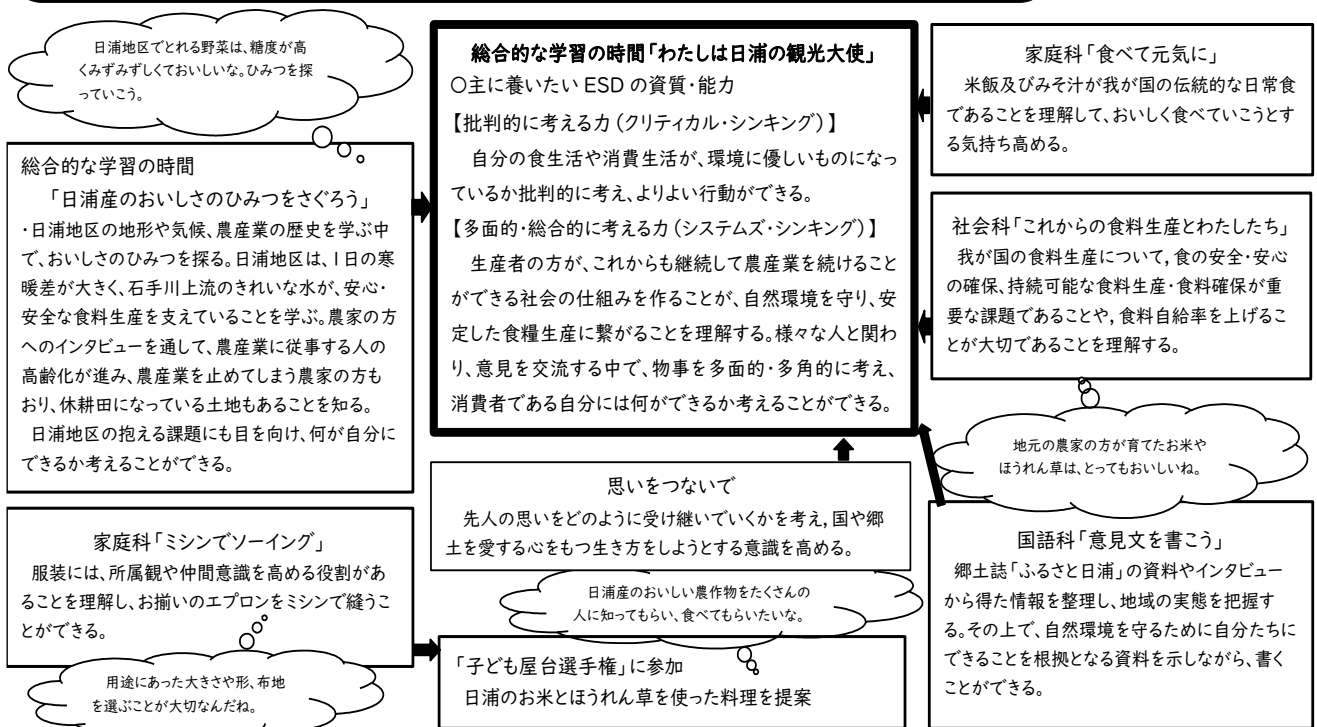
7 単元構想

小学5年生 総合的な学習の時間「未来へつなげよう!日浦の豊かな恵み」(全22時間)

日浦小学校 西河珠美

現在の学年終了時に目指す姿

自分が学んでいる地域の特産物について学ぶ中で、地域の活性化に携わる人々の思いや願いに気づくとともに、地域のために自分たちができることを考え、行動できるようにする。



8 授業の実際

(1) 収穫体験(稲刈り・ほうれん草)

単元の導入では、1学期の学習「日浦産のおいしさのひみつ」を振り返った(資料1)。10月28日(土)に開催される「こども屋台選手権(主催:まつやまこども屋台選手権実行委員会)」に出場することが決まっていた5年生は、今まで関わってきた米農家さんのお米と、野菜農家さんの作ったほうれん草を使ったメニューをぜひ提案したいという意見で一致した。

そこで、実際に使う食材を自分たちの手で収穫して、調理を行うためにそれぞれの農家さんを訪ねることにした。事前に以下のことについてワークシートにまとめてから、探検に出かけた。

①探検の目的②インタビュー内容③感謝の気持ち

米農家さんでは、コンバインの稲刈り(資料2)をほうれん草農家さんでは、収穫～袋詰めまで(資料3)を体験させていただいた。ほうれん草の収穫では、鍬を土の中にぐっと入れ込み、根を切って収穫することや、根や変色した葉は切り落とすことなど、ポイントを教えていただいた。どの商品も均一になるように200gをはかりで量ることや、鮮度を保つために根の部分の水に十分浸してから、袋詰めをするなど、農家の方の商品への心配りや思いについても知ることができた。

(2) SDGsコンダクターさんとの学び

本校は、昨年度から松山市SDGsアライアンス校(市内8校)に指定されており、SDGsコンダクター(大学生)と学びを共にしている。派遣期間は、令和5年9月～令和6年2月、派遣回数は最大5回となっている。そこで、今年度は、以下のように派遣依頼計画を立て、共に「食」をテーマに学びを深めることにした(資料4)。

回数	派遣日	時間	人数	内容
1	9月 5日(金)	13時35分～14時20分	4人	レクリエーション・SDGs基礎知識
2	9月21日(木)	12時45分～15時30分	3人	稲刈り(借用田)
3	10月 3日(火)	10時30分～11時15分	3人	脱穀(学校田)
4	10月12日(木)	13時35分～15時30分	3人	調理(炊飯)
5	10月26日(木)	13時35分～14時20分	3人	食品ロス、世界食糧問題等

(資料4) SDGsコンダクター派遣依頼調査票

第1回目は、顔合わせも含めたレクリエーションを行い、これから共に学ぶSDGsについてプレゼンテーションを基に基礎知識を確認した。クイズ形式で分かりやすくプレゼンをしてくださったので、楽しく学ぶことができた。

第4回目は、収穫したお米を用いて、「お米がごはんになるまで」を学び、試食会を行った(資料5)。その際、「イチオシおにぎりのおとも」を語りながら、おいしくいただいた。それぞれが異なる意見だったこともあり、どんな食材もお米と相性がいいことを再確認した。

農作物のおいしさの秘密

- きれいな水が流れる石手川、福見川が近くにあり、その水で育てているから。
- 日浦の寒暖差のある気候が、野菜のおいしさである糖度をあげているから。
- 養分たっぷりの土地で育ち、栄養をたくさんとっているから。
- 採れたて新鮮だから。
- 愛情をかけて育てているから。



(資料1) おいしさの秘密

コンバインは一気に稲を刈り取ることができます。



だから、玉井さん一人でも広い田んぼの稲刈りを行うことができるのだそうです。

(資料2) 稲刈り体験



(資料3) ほうれん草収穫



(資料5) 調理実習

第5回目は、今まで共に学んできたことを振り返りながらも、視野を広げて、日本の抱える食料問題や世界の貧困など、資料を基に考えることができた。最後は、SDGs宣言として、参加者全員で、今からできること、行動をおこすことを決め、紹介しあった(資料6)。

- ・一食一食に感謝し、一口一口を味わっていただきます。
- ・食事は、好き嫌いをせず残さず食べます。 ・ まだ使えるものは、人に譲ったりして活用してもらいます。
- ・地産地消を心がけます。 ・ 水道の水を大切に使います。
- ・食材を使い切るように献立を考えたり、買いすぎたりしないようにします。
- ・安さだけをみて買うのではなく、賞味・消費期限を確認して買い物をします。
- ・近いところは、車ではなく自転車や徒歩で行きます。

(資料6) SDGs宣言

(3) こども屋台選手権(※)への参加

「こども屋台選手権【令和5年 10月 28日(土)開催】」に向けて、準備を進めた。保護者と子どもたちとで、考案したメニューは、「ルーローハン」。松山は、台湾台北市と友好協定を結んでいる。そこで、台湾の食文化を知ってもらいより友好を深めるため、そして日浦の食材のおいしさが引き立つようにとの思いを込めて考案された(資料7)。こども屋台選手権では、1食200円以内で200食作る。お客さんは、食券3枚と投票券を1200円で購入する。だから、まずは、お客さんに商品を手にして、食べてもらわなければならない。そこで、お客さん呼び込むには、どんなことが必要か考え、アイデアを出し合いながら準備を進めた。お客さんの目を引く看板、宣伝、接客態度など様々な意見が出た(資料8,9)。また、家庭科「ミシンでソーイング」では、お揃いのエプロンを製作し、チームの一体感を出すことができた(資料10)。

当日は、メニューのアピールポイントを明確に持ち、積極的にお客さんに声をかけ、販売した(資料11)。

※ 子どもたちが屋台を運営し、全てを自分たちの手で行い、チームでメニューを考え、原価計算から商品づくり、売り上げまでの全工程に携わることで、商売の楽しさや社会の仕組みを学ぶ機会を提供することを目的に開催された大会。松山大街道で開催

※ 主催者:まつやまこども屋台選手権実行委員会

①メニュー

～日浦ガールズがつなぐ～愛媛と台湾☆友好ルーローハン～



(資料7) メニュー

②看板づくり



字の色や形配置など工夫をしました。

(資料8) 看板づくり

③宣伝

自分たちのお店に来ていただけるように、チラシを手紙と共に手渡すことにしました。



(資料9) 宣伝

④おそろいのエプロンでチーム感



『チームの一体感を出すために』おそろいのエプロンを身に付けることになりました。ミシン縫いに苦労したけれど、出来上がった時は、とてもうれしかったです。

(資料10) 宣伝

⑤接客

- ・笑顔で
- ・丁寧に
- ・目を見て
- ・メニューをアピール



(資料11) 宣伝

活動の振り返りでは、意見交流が活発に行われた(資料12)。「行動することの楽しさと大切さを感じた」と感想を述べた児童の発言に、全員が賛同するなど、活動への充実感の高さが伺えた。

開発したメニューは、本校栄養教諭の厚意により、給食メニューにも採用され、近隣校にも日浦のおいしい食材をアピールすることにつながった。

- 日浦公民館の館長さんや先生方に来ていただき、おいしいと言ってもらって嬉しかった。
- 日浦産の食材を使った料理を提供することで、日浦の農家さんの食材を知ってもらえて嬉しかった。
- 水がきれい自然豊かな日浦の魅力を伝えることができた。
- メニューを見て、台湾の方が声をかけてくださった。友好のきっかけになった。
- 行動することの楽しさと大切さを感じた。
- 活動を支えてくれた家族に一番感謝の思いを伝えたい。
- 人においしさや味を伝え、手にしてもらおう事の大変さを実感し、飲食店の方の苦勞を知ることができた。
- 調理しても、手にしてもらわなければ(売れ残ってしまったら)廃棄することになるので、食品ロスについても深く考えた。
- 食材を購入する際に、価格が季節によって変動していることを知った。最近では、温暖化や燃料の高騰により、野菜や卵が値上がりしている。自分の消費行動について見つめなおし、考えることができた。

(資料12) 活動を通しての児童の感想～ワークシートより抜粋～

9 成果と課題

- 地域を歩き、地域の方のお話を聞き、思いを聴くことで、私たちに何ができるのかを自分事として考えることができた。
- 農家の方々の思いを実際に知ること、私たちの食生活が、こうして農家の方々の愛情と努力によって支えられていることを知ることができた。
- 良いものであったら必ずしも消費者が手にしてくれるとも限らない。そこには、生産物(商品)の情報をいかにアピールし、人の消費行動につなげるかも大切である。流通の実際を体験し、食の安心・安全・価格・栄養価・料理の提案など、より魅力的な情報発信についても考えた。
- 米農家の方の思い「みんなにもっとお米を食べて欲しい」を直接聞き、自分たちの消費行動が、生産者の方を応援することにつながることを知った。
- 豊かな自然環境に恵まれた日浦地区も高齢化が進み、農業を営む方も減少している。耕作放棄地も年々増加している現状がある。石手川の両岸に広がる棚田の美しい風景を守るために何ができるのかについてを探究課題としてより深く考えていくことが、これからの未来を創る子どもたちの学びに必要であると感じた。